

# 脳神経センター長からの一言 vol.2

## メガホン脳神経内科

大学病院から福岡中央病院の脳神経内科に異動して、高齢の方を診る機会が多くなりました。認知症の方もたくさん診ていますが、診察で困るのは、高齢で耳が遠い方です。質問をしても回答がなかったりちんぷんかんぷんだったり。聞き取れていないのか、認知機能が落ちているのか？特に私が着任した昨年からは新型コロナ感染症の流行のために、マスクを必ず着けて診察していますから、どうしても声がくぐもってしまいます。仕方がないので、どなるような大きな声で話し続けます。すると、すぐに喉を傷めて、声が涸れてしまいます。これでは全く診療になりませんね。

以前に郷里の病院に母親を連れて受診したことがあります。母親は難聴がひどくて、先生の話が全く聞き取れず、何度も聞き返します。申し訳ないなあと思っていると、やおらその先生は、デスクの上に置いてあったオレンジの大きなメガホンをとりあげて、母親の耳元に当ててしゃべり出しました。もう僕はびっくりしたのですが、一発で母親には通じました。

このエピソードを思い出して、百均ショップで青色の大きなプラスチック製のメガホンを買ってきました。これを診察デスクの上に置いて、耳の遠い方が来られたときに、さっそく使ってみました。そうすると、話が通じたようで笑って答えられます。OK。聞こえが悪くてきちんと答えられないのか、認知機能が悪くて答えられないかの判断はとても大事です。忙しい外来診療の中では、なかなか聞き取ってもらえないとき、ついまあいいかと済ませてしまいがちです。それを避けるためにもメガホンは欠かせません。

というわけで、私はこの頃はもっぱらメガホンを使って診療をしています。捨てられても困るので、外来の看護師さんには絶対捨てないで下さいとお願いしています。それで私の使う7番診察室には、いつも青色の大きなメガホンが鎮座しています（なんでメガホンなんか置いてあるのですかと患者さんに聞かれることもありますが）。脳神経内科は、診察に様々な小道具を使います。たとえば、腱反射を調べるハンマー（打腱器）、振動覚を調べたり聴力

を調べたりする音叉、触覚を調べるティシュペーパー（以前は筆を使っていた）、痛覚を調べる爪楊枝（以前はピン車を使っていた）、瞳孔の対光反射を調べるペンライトなどです。これらの七つ道具の一つに、高齢者を見る老年神経内科ではメガホンを加えてもいいですね。

もっとも最近では、耳が不自由な方のためには、医師の口元の声を患者さんの近くで聞きやすい音で大きく聴こえるスピーカーも市販されています。10万円もするような高額なものなので、私の研究費でとりあえず1台でも入れてみようかとは思っています。でも100円のメガホンでも十分機能するように感じています。

ところで、認知症を起こす主な原因疾患であるアルツハイマー病では、沈着するアミロイドベータを除去できる生物学的製剤（モノクローナル抗体製剤）が米国と日本において医療保険で使えるよう申請されています。これが保険承認され、広く使用できるようになるとアルツハイマー病の根本的な治療薬となり、特に初期のアルツハイマー病の患者さんでの治療効果が期待できます。私たちは、既に多発性硬化症などの神経免疫疾患で生物学的製剤の扱いの経験が豊富ですから、積極的にこのような治療にも取り組んでいきたいと思います。近日中にアルツハイマー病の診療は様変わりするかもしれませんね。

この4月にはMRIも3.0テスラの最新のものに入れ替わりますので、診療の質が大きく向上することは間違ひありません。当院脳神経センターでは、脳の健康クリニックにおいて、幅広くもの忘れに不安を感じておられる方の診療にあたっています。脳神経内科の中に、認知症の患者さんを幅広く診療している脳の健康クリニックはありますので、ご心配な方は早めに受診されることをお勧めします。

2021年1月4日  
福岡中央病院脳神経センター長 吉良潤一